

第5回研究例会

概要

本研究例会では、石濱純太郎とその周辺をめぐる諸問題について、主に石濱純太郎をめぐる人々について、講演と研究発表が行われた。

長田俊樹先生（総合地球環境学研究所 名誉教授）による講演「石濱シュールの人々―財津愛象・西田長左衛門・大島仲太郎」は、財津愛象、西田長左衛門、大島仲太郎と石濱シュールとの関係を明らかにしたモノである。財津、西田、大島は、大学教授としての肩書きを持たず、学問的には後世に残る仕事をしたわけではなかったが、丹念な資料調査によってその人物像が明らかにされ、西田と大島に関しては詳細な著作目録が作成された。この3人の人物像が描き出されたことによって、市井の学問を志す人々を受け入れた石濱純太郎の姿勢が示された。また、本講演では、本研究班が新たに購入した狩野直喜と財津愛象の書簡から得られた情報も披露され、貴重な資料であることが報告された。

吉村直哉先生（元市岡高校教諭）の研究発表「石濱純太郎と金鐵会の人々」では、丹念な資料調査のもと、金鐵会の構成メンバーと石濱純太郎との繋がりを明らかにし、さらにはその周辺の人物との関わりにも触れ、金鐵会関連活動の詳細にもとづき、石濱純太郎と金鐵会をめぐる築かれた人間関係の全体像と交流の具体的な足跡を辿られた。（主幹研究員／奥村佳代子）

発表要旨

「大阪大学附属外国学図書館所蔵『満蒙漢三文合璧教科書』について―『満州語教本』との関係を中心に―」

大阪大学附属外国学図書館には『満蒙漢三文合璧教科書』（以下、『教科書』）なる満洲語文献が3帙所蔵されているが、本発表ではこのうちの文献番号「Mn390/18/1~10」を対象に、その内部に残された日本語の書き込みについて考察した。昨年(2022年)末に大阪大学附属図書館石濱文庫から『manju gisun tacibure hacin -i bithe jai debtelin（通称：満州語教本）』なる新資料が発見されたが、これは上原久氏が1960年代にその存在を明らかにしていた『満州語ヲ学ブ初歩（manju gisun tacibure tuktan bithe）』と対をなす下巻にあたるものであり、共に渡部薫太郎が大阪外国語学校で満洲語の授業を担当した際に作成・使用した教材である。これら教材の種本は共に『教科書』であるが、今回、『満洲語教本』の満文日本語訳と上記の『教科書』に残された書き込みを照合した結果、同一人物の手による可能性が高いことが明らかになった。以上より、『教科書』の書き込みは、渡部薫太郎が満洲語の教材を作成した際、あるいはそれ以前に自ら満洲語を学習した際の痕跡であると結論づけた。（研究員／松岡雄太）